

活用レベルの言語活動

—「理解→練習→使用」という流れの授業において—

佐藤臨太郎

(奈良教育大学)

1. はじめに

一般に「理解→練習→使用」の授業では、生徒は明示的な説明や、あるいは英語での暗示的な指導により目標文法項目を理解した上で、口頭練習や暗記、音読等の活動を行う。その後、実際に英語を「活用・使ってみる」段階に入る。しかしながら、頭で理解し(実は「したつもりになっている」「しかかっている」場合が多い)、練習したからといって実際に使えるようになったということではないので、この「活用レベルの言語活動」が不可欠である。本稿では Book 2 Lesson 5 の不定詞の扱いを例に簡単に提案したい。

2. Listening (活用レベルのインプット)

「理解→練習→使用」という流れの授業で問題となるのは言語習得の大前提であるインプット量の不足である。活用レベル段階においても生徒からの英語の産出を急がせず、いわゆる「教室英語」を超えた意味のある質の高い教師からの口頭でのインプットを潤沢に与えるようにする。Lesson 5 のトピックは My Dream なので、教師自身が自分の今の夢や中学時代の夢を語ったり、あるいは第三者の夢を生徒に伝えることができるだろう。レッスンの導入で同様の活動をしていた場合でも、今回の teacher talk では意図的に不定詞を使用し、生徒が習って練習した知識の consolidation, confirmation の機会を与える。理解がまだ充分ではない生徒にとっては「気づき」の機会にもなるであろう。

またこの段階でのインプットでは生徒より若干上のレベルではあるが理解可能である“ $i+1$ ”のインプット (Krashen, 1982) をできるだけ与えることが重要である。生徒は文脈や、前後関係、または教

師の表情やジェスチャーなどを手掛かりに多少レベルの高いインプットを理解しようとするのだが、この時に習得が進むと考えられている。マラソンを完走するのに少しずつ走行距離を伸ばしたり、筋力をつけるのにバーベルの重さを徐々に上げていくのと同様である。この“Listening”での活動を interactive にして生徒からのアウトプットを引き出すことも可能である。

T: Ichiro had a dream to be a member of 中日ドラゴンズ when he was a child. He practiced very hard to join the team. The Giants were very popular then, but he liked the Dragons. Do you know what “popular” means, ... Keiko?

K: ... No.

T: OK, it means “many people like the team” . The Giants were very popular, or many people liked the Giants. (1) Well, which sport is popular among boys in this class? ... Satoshi?

S: Soccer is pop ... pop ...

T: Popular ... (2)

S: Soccer, ... pop ... popular ...

T: Sorry? (3)

S: Soccer is popular.

T: Oh, I like soccer very much too ...

下線部 (1) は未知語, popular の説明である。インプットにおいては生徒がそのまま理解できる単純化されたインプット (simplified input) だけではなく詳細化されたインプット (elaborated input) を与え、習得を促すようにする。下線部 (2) では、生徒の発話

を生かし、誤りを訂正してモデルを示す「リキャスト (recast)」が用いられ、下線部 (3) ではリキャスト後に正しい英文を産出できなかった生徒に「明確化要求」を与えることにより気づきを促している。以下、時に生徒とのインタラクションをとり、誤りを含むアウトプットにはフィードバックを与えながら、インプットを与えていく。(インタラクションやフィードバックの言語習得への効果等については松村 (2012) 等参照。) Listening 後に、T&F や comprehension check 等を行い、間違った場合は再度口頭でのインプットを与え、正しい理解へと導くようにする。

3. Speaking and Writing (アウトプット活動)

Book 2 Lesson 5 USE ではスピーチを最終目標にしている。ここでは、最終目標を達成する準備段階の活動としての自由度の低い practice の要素のある活動から、徐々に自由度の高くなる活動への流れを提案したい。

Role play 2人でペアになり、以下の会話について、①役割を決め、空欄を埋めながら会話してください (英文は見てもかまわない)。②次に英文を見ないで会話してください。③役割を交代し①、②の活動を繰り返してください。

A: What do you want to be in the future?
 B: I want to be a () because ().
 How about you? What is your dream?
 A: My dream is to be a (). I have two main reasons. First, ().
 Second, ().

この活動に入る前に 2 Speak の「スピーチの準備をしよう」を利用して、(夢は) I want to _____. (理由は) First, _____. Second, _____. (最後にもう一度) So, I want to _____. の英作文をさせてから行うとよい。

続いて、若干自由度の高い活動である。

Interview 将来の夢について、できるだけ多くの人にインタビューして、表に名前と何をするかについて書いてください。また、それ以外の

質問を 1 つ加えて、その人の情報を聞き出し、自由に会話を続けてください。

(できるだけ何も見ないで会話すること)

名前 _____ 何をするか _____ その他の情報 _____

質問例: What do you want to be in the future?

回答例: I want to be a teacher to teach basketball.

これらの活動については、「実際のコミュニケーションではあらかじめ言語項目を決めることはない」という見方や、「習った文法事項を意識して使って活動しているだけだ」という考えもあるが、目標文法の意図的・意識的使用は、授業時数が限られており、日常生活において英語に触れる機会の少ない学習環境においては不可欠であると考えられる。そして、最終段階において、どの文法項目を使うかの判断を学習者に委ねた自由度の高いロールプレイや、ディスカッションなどの様々なタスクを活用する。Lesson 5 USE におけるスピーチ原稿作成、発表もその活動に当たるが、しっかりと、「イントロ→したいこと→理由 1, 2→結論」という構成を説明し、使用の奨励される文法項目と模範文(不定詞の副詞・形容詞用法)を確認しておきたい。

4. おわりに

以上、「理解→練習→使用」という流れでの「活用レベルの活動例」を簡単に提案してきたが、再度、「教師からのインプット」の重要性を強調したい。生徒の反応をみて臨機応変に難易度を調整しながら意味のあるインプットを与え、生徒の誤りに瞬時に気づいて的確なフィードバックを与えるには、相当に高度な英語力が要求されるのは間違いない。しかしながら、我々は英語教師である以上、その英語力を身につけるべく日夜精進していかなければいけないのである。(自省を込めて。)

【参考文献】

Krashen, S. (1982). *Principles and practice in second language acquisition*. London: Pergamon.
 松村昌紀 (2012). 『タスクを活用した英語授業のデザイン』東京: 大修館書店。